

日本縦断走り旅が終わった

新潟県 高橋 一

森塚さんの好意に甘えて「日本縦断走り旅」の仲間に加えてもらい北の宗谷岬から南の佐多岬まで旅を出来たことは森塚さんに「ありがとうございました」以上の言葉が見当たらない。

自分の足で日本縦断をする意味を問われても明確な答えは無いが、登山する人と同じように「日本縦断の走り旅」があったから仕事を辞めてまでも参加したかった。

走り旅前夜

新潟港から9月18日午前10時半発のフェリーを利用して小樽港についたのは翌日の午前4時半、小樽港から一足先に走り旅のコースであるうす暗いレンガ通りを歩きながら小樽駅に着いた。データ隠しのJR北海道の電車を小樽から宗谷までビクビクしながら利用した。

途中サロベツ原野を通過する車窓から利尻富士が雄大な姿を見せて歓迎してくれた。稚内駅では激励のためわざわざ神奈川県に住む従弟が前日から宿泊して出迎えて宗谷岬まで観光しながら送ってくれた。丘の上からサハリンが見えたのは幸運であった。

引込み思案の私にとって先に宿の入っておられて九州の試走会一緒に走った田中さんから大きな声であいさついただきホットした。

第1ステージ

9月20日朝から雨模様。風も強い。72キロと1日で走る距離では全行程の中では1番長い。走り旅の初日であり元気よく走り出した。

稚内市から海岸部を走るオロロンラインでは高校生の校内マラソンと重なりお互いに「頑張って」の声を掛けあいながら走っていたが、高校生が走り去った後は、雨と砂が顔にあたるのが痛く感じるようになり旅の初日から先制パンチをもらってしまった。

北海道は、旧街道と呼ばれる街道がなく国道を主に走るルートであるため地図読みの貧しい私にとって楽なステージであったが、コンビニに地図を置き忘れた時があり前にも後ろにも仲間の姿が見えず宿に着くまでヒヤヒヤしながら走った。29キロにも及び直線道路、道路の路肩が極端に狭いトンネル、峠越えもいつの間にか下りに入っているなど普段と違う感覚があった。最終日の小樽は、魚市場で土産を買い家に送った。又、函館山に登るなど時間があり市内を歩き回った。

第2ステージ

朝早くフェリーで津軽海峡を渡り青森から仙台を目指すステージである。

遠くに秋の気配を見せる八甲田山や岩手山、畑には色づき始めたりんごと植え付け真っ盛りのにんにく。山奥を貫いている街道と林道が交錯して道に迷いながらも自然いっぱい走り旅を仙台まで続けた。世界遺産の平泉に沼宮内の秋祭りともっと欲しい走り旅であった。洩民の宿からはこの大会を誘ってくれた小池さんも下関まで一緒に参加した。

健脚の彼と走れたのは仙台まででそれ以後は、毎日段々後ろ姿が遠くなる走り旅であった。また、アルコールを飲む機会が増えて来たのもこの頃からであった。

第3ステージ

仙台から東日本大地震の放射能汚染のため仮設住宅がまだ残っている福島県を通り東京までのステージである。

本宮付近で家の除染された竹林の持ち主に放射能汚染の事を聞くと「ズット前から放射能が出ている、気にしても仕方がない」と言っておられた。原子力発電所ができたから40年も経つと気にならなくなったのだろうか。今も漏れている放射能のことも時間の経過とともに風化してしまうのだろうか。

宇都宮では台風のため出発時間が2時間遅れた。距離も61キロと長いので皆朝から飛び出した。第3ステージの後半からは大きく意識しなかったものの足に違和感を持っていた。調子が出ないのも大田原で同部屋になった方の風邪にでも感染したかと思っていた。この時点で足のケアを始めていれば後々苦しむことも少なかったと悔やんでいる。

第4ステージ

東京から大阪までの大都会の市街地が多いところを通り抜ける旅で地図を読む力が特に必要で有った。足の故障で走り旅の仲間の前に出て走ることができない私にとって幸いしたかも。

本来は自己責任で走り旅をするのが基本で有ったが、満身に走れない私を気遣ってくれてサポートをわざわざ家から取り寄せ貸してくれた谷川さん、赤坂宿で足首のマッサージ方法を教えてくれた金原さん、中村さんからは痛み止めを飲む時は胃薬が必要として胃薬を頂く、浅井さんからは「痛み止め薬は飲んでアカン、走って治すのだ」と言われてしまい痛み止めを飲む回数が少なくなった、など人様の好意に甘えたステージで有った。特に天竜川の橋のたもとに、宿にと2回もマッサージして下さった成良治療室さんには感謝、感謝。

この頃からエイドが各地で開設され食べるものに困らない日が続きコンビニや自動販売機に立ち寄る時間が省けて嬉しい限りであった。

第5ステージ

大阪から下関まで瀬戸内海に沿って走り旅をするので海が見えるところが多いと思っていたが小さな峠を越えるところがばかりと感じた。せつかくの旧道走りも高速道路のICやJCTのためズタズタ状態で迷わずに通るには難しい街道になっていた。このステージからは、ほぼ毎日浅井さんの後ろを若穂井さんと一緒について走り旅を続けて地図読みの勉強をした。ただ、足の状態がよくなったある朝モヤの中を若穂井さんと地図をよく確認せず走り出し地図にないところまで行ってしまいコースに戻るのに冷や汗を流してしまった。特にそれからは「金魚のフン」みたいに浅井さんの後をひたすら走り旅を続けた。

岡山では新潟県名物「のっぺ汁」をいただき偉大な郷土の先輩貝畑氏を知ることができた。さらに、同じように大間から佐多岬まで走り旅をしている滋賀大学のK君と一緒に走る

ことができ旅の楽しさを味わう。

森塚さんのお姉さん、小池さんの妹さんから食べ放題、飲み放題の夕食をご馳走していただいたのもこのステージであった。

第6ステージ

試走会で門司から薩摩川内まで走り旅の経験が有る街道コースは、何となく判り通り過ぎると記憶が蘇るがひたすら浅井さんの後ろ姿を拝む毎日を過ごした。このステージのメインである三太郎越えは、舗装された赤松太郎は単に走れば越えられる峠。佐敷太郎は、ミカン産業が盛んであれば難なく通過できたと思われる頂上付近の放置されたみかん畑脇を通過する街道はツルが伸び放題の荒野。下りの獣道のような街道は素人には見つからない。最後の津奈木太郎は、峠の入り口が高速道路工事で立ち入り禁止になっていて歩く人もいないため荒れ放題の峠道になっていた。

桜島の降灰を道路や車さらに家の屋根を見ると雪国の者にとって春になれば確実に消える雪のほうがまだ良いと思った。

本土最南端の岬であればもう少し観光客が多く賑やかな場所と思っていたが余りにも寂しいところで歓喜の声を上げられないゴールとなった。

ただ、走り旅を主催してくださった森塚さんが御崎神社でコウベを下げている姿を見て森塚さんへの感謝と自分が日本縦断を出来たことの達成感で涙が出そうになった。

59日間朝一斉に宿を旅立っていた旅人が、18日の朝は6時頃から歩き出す者、7時にバス停まで歩くと言って宿を出る集団、飛行機に乗るまで時間があるので宿に残る集団とバラバラに旅立って走り旅の終わりを物語っていた。

8時間余り掛かって鹿児島空港から飛行機に乗った時は一人ぼっちになり寂しさが湧いてきた。

振り返って

ジャーニーランのベテラン参加者と異なり素人の私が完踏できたのは、故障した時に助けてくれた方々、時にはダジャレを言って気持ちを和ませてくださったたり食事やサプリの取り方を教えてくださった越田さん。一日の走り方をわけて走ることを教えてくださった最年長の田中さん。酒と温泉があればどこまでも走りそうな毛利さん。午前中は調子が出ないと言いながらいつの間にか前で走っている鈴木さん。故障を抱えても佐多岬に立ちたい気持ちを強く持った町田さん。遅く着いた時は着替えもせず地図配りをして下さり、膝に故障を持ち痛み止めを飲みながらも走り続けた長尾さん。各地でエイドを出してくださった励まし隊の皆様を始め多くの方々の好意があったからと感謝しています。

特に若穂井さんからは、同じ新潟県出身であるため「方言が懐かしい」と言いながら一緒に走ってもらい、旅館を利用する時は相部屋にさせていただくことが多く頼れる先輩として安心感を強く持つことが出来ました。